

造形表現技術の課題における考察 — 発表会づくりを通して —

桂 川 成 美

岐阜聖徳学園大学教育学部

A consideration of tasks for techniques of artistic expression: Through making a recital

Narumi KATSURAGAWA

キーワード：造形表現 発表会づくり 幼児

I. はじめに

保育専修三年生の造形表現技術という授業の最後の課題として、発表会づくり をテーマとした。

課題はグループで取り組み、保育の中で行われる子どもの発表会を企画し、子どもにどのような事を経験、体得させるかというねらいを持って内容を考え、必要な小道具大道具などを計画、制作するという課題である。

どのようなものをどのように作るか、作ろうとするものに必要な材料や道具などを、知識や経験を生かしてグループでアイデアを出し合いながら、考え制作させたいという意図がある。

幼稚園教育要領の表現の目標は、「感じたことや考えたことを自分なりに表現することを通して、豊かな感性や表現する力を養い、創造性を豊かにする。」である。¹⁾ 創造は、今までになかったアイデアや、ものを作り出すことという意味である。そういった方向性のことを創造性と言うならば、何かを思いつき、具現化、表現しようとすることであると言える。例えば表現の結果が既存であっても、思いついた時点で何かの模倣でなく、自分の内から湧き起こったことであれば、その人にとって今までになかった事であるから、創造性があると言える。

幼児の表現活動について、佐木みどりは、「子どもが主体的に環境に関わり、自ら関心を持つ事象、ことや物を見つけ、そしてなんでだろうどうしてだろうと試したり調べたり、そこで得た情報や知識を取り込んでその子らしい様々な方法で表現する事、幼児にとって遊びは自分の興味に基づき自発的に展開される表現または表出行動である」²⁾ と述べている。そして、「大人の思いだけを押しつけて遊びや活動をさせようとしても子どもは関心を示さない」と述べている。

子どもは創造性において決して大人に劣るわけではなく、子どもなりに自分の体験や経験、見た事知った事を通して創造性を発揮することが出来るのである。

造形活動の目的である創造性を豊かにすることは、子どもが遊びを通して、自発的に興味関心を持った事から展開する表現、表出行動 を保育者が支える事であると言える。

創造性を養うことが何故勧められるのか。

私たちには、見たことのないものを見たい、知らないことを知りたい、感じたことのないことを感じたいという思いがあって、個人の経験、体験したことを基に得られたイメージ、思いついたことを具現化、表現しようとする。その創造性のある何かは、世の中や人にとって良いこともあり悪いこともあり、どちらでもないものもあるかもしれないけれど、それらが私たちを変化させていくきっかけになる可能性を持っているからではないかと思う。

子ども時代に培われた創造性は、それを基に大人になっても発展し続ける。そして、その始まりである子どもの創造性を支え引き出すためには、子どもの意志を汲み取り具現化する手立てを考え、サポート出来るよう、保育者自身もそれを発揮しなければならない。子どもにさせるだけでなく、保育者も共に関わり合いながら自身の創造性を発揮しなければならない。

そうすることで、子どもが、自分が感じることや考えることを認め、他と関わり変化し、自分を深め、新たな創造性を発揮することを可能にする。そういった、創造することのプロセスを体感させ、その基礎を身につけさせることが、表現、造形活動の目的であると考ええる。

この活動を通して、学生の学び得ていることの現状を知り、造形活動で行いたいことへの理解、到達度を知り、今後の学生への働きかけの課題を考えたい。

Ⅱ. 実践研究の方法

学生の活動を観察・記録し、その様子から何故そのようにするかを考察し、課題に対する到達度を見る。そこから、学生に必要な経験や知識について考え、今後どのように働きかけるかを考える。

Ⅲ. 実践内容詳細

1. 課題説明

90 分の授業 6 回で行う。グループは 5～6 人で組む。計画を書き込む用紙には、発表会の内容のタイトルと、発表会を行う子どもの対象年齢、ねらい、作るものの計画を文字とイラストで記入させた。

その際に、場面設定や、それに伴って必要になる大道具、小道具なども、ねらいに沿って考えるよう伝えている。

制作するものは大道具、小道具であるが、発表会自体が表現であるので、どのようにするか考え、それに合わせて作るべきものも考えさせた。

2. プラン

各グループで、ねらいをどう持つか、劇の場面はいくつに設定するか、必要な大道具小道具、制作に必要な材料や制作方法について話し合いながら決めさせ、用紙に記入させた。

(1) 各グループのプラン

グループ・タイトル・対象年齢	ねらい	作るもの
グループ a 赤ずきん 5 歳	・役になりきって、友達とやりとりするを楽しむ	背景、前景、赤ずきんの衣装 小道具 (赤ずきん・服・パン)、 狼の衣装 (被り物・シッポ・ 手・胴体部分)、お婆さんの 衣装 (被り物・服)、猟師の 衣装小道具 (鉄砲・服)
グループ b ぐりとぐら 4 歳	・友達と話し合って発表会を作る達成感を味わう ・友達と一緒に自分なりの力を発揮し、のびのび表現することを味わう	お面 (ウサギ・ゾウ・クマ・ へび・ライオン)、背景 (森)、 ぐりとぐらの衣装、フライパン、パンケーキ

グループ c 1 1 ぴきのねこ 5 歳	<ul style="list-style-type: none"> ・協力して劇遊びをする ・役になりきって表現することを楽しむ ・自ら発表会づくりをすることで達成感を味わう 	猫の衣装（被り物・シッポ）、釣竿、イカダ、大きな魚、背景（海・魚のシルエットの仕掛け）
グループ d 1 1 ぴきのねことあほうどり 5 歳	<ul style="list-style-type: none"> ・自分たちで作ったオリジナルの小道具を身につけることで楽しんで役になりきる 	ねこ・とりの被り物（張り子で作った上に子どもが色画用紙を貼る）、ねこのシッポ、鳥の羽
グループ e 忍たま乱太郎 じんべエごめんの段 5 歳	<ul style="list-style-type: none"> ・子どもたちの間で流行っている手裏剣遊びを取り入れる ・お話の内容から友達と喧嘩した時の心情を理解させる 	背景（教室）、衣装、ずきん、手裏剣

図1 各グループのねらい・作るもの

(2) 考察

よく扱われそうな劇にしやすいお話や、自分たちが好きな絵本などを内容に決めている。

しかし、お話の中の面白さ、どうしてこのお話が好きなのか、また何故よく扱われるかということのをあまり考えていないグループもあり、機械的に場面を分け、大道具小道具の考案をして行くという流れが多かった。(グループ a・d・e)

発表会づくりの考え方の要点を具体的に話す必要があると思った。作るものだけでなく、発表会の内容自体が表現であること、一つのお話の中でどのような表現に面白みがあるかを考え、子どもがこのお話をどのように捉えるか、どんなことをやって見たいと思うかなどを考え、それを中心に作るものを考える必要がある。

ねらいについても、「役になりきる」「自ら発表会づくりをすることで達成感を味わう」など表現することに関わるねらいを立てているが、なぜそれが必要かということをはっきりとは掘めていない感じがした。

3. 制作

(1) 各グループの制作

① グループ a



図2 狼の手



図3 狼の衣装



図4 おばあさんの家

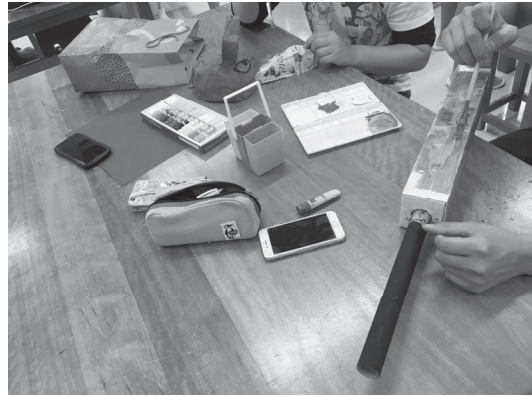


図5 鉄砲

図2 狼の手を作ろうとしている。どのように手に装着し、自由に動かせるようなものにできるかを試行錯誤していた。何人かが関わって作っていた。

図3 狼の衣装

お腹に石を詰めるためのポケットを作りつけていた。その場面は重要であると考えたのかもしれない。

図4 赤ずきんのおばあさんの家。

窓にスズランテープを使って透けるように工夫している。

図5 小道具の鉄砲を制作している。材料を繋ぎ合わせる際に、表にセロテープが見える状態で貼り付けて作っていた。この小道具の重要度をはっきりしておらず、必要分のものを作り体裁を整えようと作っていることの表れである。

① グループb



図6 強度を上げる工夫



図7 背景の森



図8 パンケーキ

図6 今までの経験と知識から、大きな貼り合わせた紙の強度を上げるために裏の端にガムテープを貼るなど、工夫を施している。

図7 背景の森の風景を作っている。色画用紙をちぎったものを貼っている。貼る紙の色や貼り方などを子どもと相談しながら決め、制作に参加させる計画である。

図8 お話の中で一番面白い場面であるパンケーキが膨らむ様子をどのように表現するかアイデアを出し合いながら考えていた。これも子どもと相談しながら考えていく計画であると話していた。

② グループc



図9 猫の耳



図10 雲



図11 魚

図9 スマートフォンで検索した猫の耳の作り方を見て制作している。お手本通りであるため、早く綺麗には作れるが、制作に試行錯誤がないことに気づいて欲しい。制作するもの全てにオリジナリティーが必要ではなく、この制作についてはこれで良いが、効率を優先させるものと、考えて工夫して制作した方が良いものの違いを考えられると良いと思う。

図10 空に綿を貼って雲を作ろうとしている。ナイロンの綿を何で接着しようかということと、白い背景に白い綿を貼るため、雲が見え易いようにするためにどうしようかと考えているところ。海の波の部分は、この後アルミホイルやスズランテープを加えて波の光る感じや透明感を表す工夫をしていた。

図11 劇中で釣り上げられる大きな魚。劇中でインパクトのあるものであるため、貼る色画用紙の色や貼り方を考え、力を入れて制作していた。

③ グループd



図12 被り物

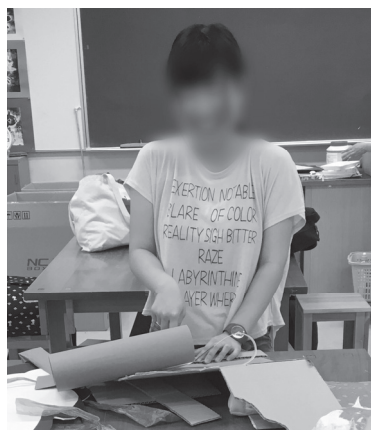


図13 尻尾

図12 衣装の被り物を張り子で制作している。張り子は1年生の授業で経験している。

しかし、張り子は手間がかかるため、一つだけで良いものであれば張り子で良いが、多く必要な場合は別の方法を思いつかなければならない。また、劇中の何に力を入れるかということによっては、被り物はもっと簡素で良いかもしれない。

図13 猫の尻尾を制作している。制作方法がなかなか思い付けず、何度も作り直していた。何人かで考えながら制作して完成した。

⑤ グループ e



図14 教室の背景



図15 忍者の衣装

図14 背景になる教室の壁面を作っている。黒板や時間割表、壁面などテレビアニメの絵を再現するようにしていた。

図15 何色かのゴミ袋を準備して忍者の衣装を作ろうとしている。柄をビニールテープで作っていた。

(2) 考察

制作するもの一つ一つに対しては、経験を生かしながら工夫して制作できるが、発表会全体や、子どもをどのように主体にするかという配慮の視点を持って作られることは少なかった。

グループbとcは、劇中の見せ場を考えており、子どもの制作への参加も、それをもとに考えていたが、他のグループは登場人物の人数分の小道具と背景を作ることを中心に考えており、その一部分を子供に参加させるという発想であった。

4. 中間発表

制作の半ばで中間発表をさせることにした。各グループにねらいと、制作しているものを発表させ、ねらいの内容や、子どもがどのように関わるかといったことについて質問し、制作の様子を見て気になったことを話すことで考えを深めさせ、残りの制作をさせようと考えた。

どのグループも子どもを制作に参加させる計画をしていた。劇のセリフを覚えさせるだけでなく、子どもが劇づくりに関わらなければいけないということは考えていた。

ねらいに書かれていた「役になりきる」というのは、なぜそれが必要だと思ったのかと質問したところ、グループcは、「役になりきることは自分の発表に自信を持つことになるから、それぞれの役に懸命になれば子どもたちが自分たちの発表だと思えるから」と答えた。他の「役になりきる」をねらいとしていたグループaとdはこの質問に答えられなかった。

このことから、表現することに対して子どもが主体でなければいけないということに気づいている学生は少数であると感じた。

また、制作時間が残り少なくなると、制作物の作り方が荒くなり、接着するものの表にセロテープやホチキスの針が出ているような作り方を始めている学生がいたため、小道具・大道具を間に合わせて制作することが発表会づくりではないということと、計画したもの全てが仕上がらなくても、どのような発表会にしたいかということをおお切にして制作するよう話をした。

5. 制作

中間発表を受けて、最後の仕上げに取り掛かった。間に合わせることを目的にしてしまい制作が荒くなっていたものを修正し、作るものの優先順位を考えて制作し始めるグループがあった。優先順位を考えることは、どんなことが表現したいことであるかを考えるきっかけになった。

6. 最終発表

各グループに、発表会の内容・対象年齢・ねらい・制作したもの・それらの工夫点を制作したものを見せながら発表させた。

中間発表から制作物がいくつか増え、劇中の見せ場をイメージしながら進めたグループbとグループcはそれを含めて発表していた。他のグループは、制作したもののそれぞれの工夫点を発表していた。また、どのグループも子どもを制作に参加させる計画であったが、制作の決められた一部分にとどまっていることがほとんどだった。

IV. まとめと課題

保育専修の学生は、小学校教員免許取得に関する授業を受けるため、保育の造形に関する授業に加えて図画工作に関する授業も受けている。そのこともあり、絵を描いたり物を作ることへの経験値は他の専修の学生より比較的高い。

発表会づくりでは、一つ一つの小道具・大道具の制作においては、こういうものを作ると決めて試行錯誤しながら作ることはある程度出来ていた。また、子どもを参加させる必要があるということは考えられている。しかし、発表会づくりというテーマに対して、発表会自体を表現と捉える視点が弱いと感じられた。そのため、発表会の内容全体で、どうしたいかというイメージを持ちづらく、表現したいことに合わせて小道具・大道具を制作するという考え方ができていないことが多かった。どう表現したいかではなく、劇の体裁を作ろうとしているように感じられる。

子どもの参加のさせ方についても、子どもの劇へのイメージを膨らませて参加させるという発想にならず、制作物の一部を手伝わせるような形にとどまっていた。学生自身が考えているのと同様に、体裁を作ることを手伝わせるという発想になるからである。

彫刻家である佐藤忠良と画家の安野光雅らが手がけた「子どもの美術」³⁾という図工の教科書の教員や保護者に向けた冊子の中に、図工で絵や工作品ができればよいと考えるならこの教科はそれほど必要ではなく、図工の目的は人の情緒や意志を育てていくものだということが書かれている。

この「人の情緒や意志を育てていく」は、創造性を育てるということと同じ意味である。

自発的な、こういうことをしてみようという意志ではなく、しなければならぬからそのように作るでは、創造性は発揮されない。

今後の発表会づくりの課題では、発表会の内容の中で表現したいことに着目させるようなはらきかけをする必要があると感じた。そして、彼ら自身も子どもに対して同様のことをする必要があることを伝えなければならない。

また、発表会自体を表現であると捉えづらいということも課題である。

学生たちは、経験を重ねてきた制作することに対しては創意工夫、創造性のある程度発揮できたが、経験の少ない劇や音楽会といったことに対しては、表現することをイメージしづらいのだと思った。表現することに対して、このように応用が利かないのは、身につけたことが習ったことの範囲のみにとどまっているということではないかと思った。今回の活動でも、小道具の被り物を制作する際に、1年次

に習った張り子を利用しているグループがあったが、張り子は効率の良い手法ではない。数を多く制作しなければならない場合は、張り子では間に合わず、他の方法を思いつかなければならない。そういった状況に応じて手法を選択できるような学び方をできているかどうかと考えさせられた。

造形の授業で取り扱った技法や手法を、何かの作り方のマニュアルを知ることのみで受け取らせては不十分である。

それぞれの課題の内容に結びつけて、応用の例や、保育や学校の現場ではないところでの表現に目を向けさせるような働きかけをし、思いついたことを形にすることの面白さ、表現すること自体に興味を持たせるような働きかけをしていかねばならない。

注・文 献

- 1) 幼稚園教育要領 第2章 ねらい及び内容 表現
- 2) 佐木みどり (2015) : 「子どもとともに創造的な園生活を探求する保育者のあり方-アート活動における環境の構成を通しての一考察-」 岐阜聖徳学園大学紀要, 教育学部編, 162-163
- 3) 安野光雅・佐藤忠良 (1980) : 「子どもの美術-教育に関心のある父母へ」 現代美術社, 安野光雅・佐藤忠良編, 2-3